

SONRISA

そんりさ

Vol.144



1988年、首都マナグアからホンジュラス国境のラスマノスまで歩いた平和行進。40日間の断食を国家宮殿前広場で完遂した日本山妙法寺の笹森さんも参加した。

ブラジル・家族農業の危機

「そんりさ」「微笑み」を意味します。レコムは様々な活動を通じて、ラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

- 02 ブラジル アグリビジネスと家族農業 …… 翻訳ワークショップ
- 05 ニカラグア 女性に危険な国 …… 同上
- 07 新連載・ニカラグア便り …… 田中紀子
- 09 「国境を越える子どもたち」 CLIJAL活動から …… 小高利根子
- 11 ラ米百景 「モンカーダ60周年に思う」 …… 伊高浩昭
- 12 音楽三枚♪ 「水と人魚とハサミ踊り」 …… 水口良樹
- 14 食巡り 「イカのタコス」 …… ミゲル・アクーニャ
- 15 ニュースクリップ …… サザエ

2013年8月10日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

政府の後押しでアグリビジネスを押しつけ 家族農業を押し潰すブラジル

ブリサ・アラウホ

ルイス・イナシオ・ダ・シルバが労働者階級出身で初めてブラジル大統領に就任したことが、同国の社会運動を期待に満ちさせたのは間違いない。ラテンアメリカにおいて国土面積・人口とも最大であるブラジルの左派勢力にとって2002年は歴史的な勝利の年であった。ブラジリアでの就任式には労働党

(PT)の闘士や支持者らが何千人も押し寄せ、まるでPTの赤いシンボルカラーの海が新大統領を歓迎したかのような様子だった。それは民衆の中から生まれた大統領という象徴的な意味にとどまらない。構造的な不平等の国において、労働党政府の綱領は貧困の撲滅、何百万人の雇用創出と社会的公正の推進を約束したからだ。

「土地なし農民運動(MST)」にとって、ルラの当選は新時代の力強い到来となりうることを意味した。この著名な運動は、農地改革、ブラジルの農地占拠運動、生産、そして社会性を再定義することを擁護してきたし、現在も続けている。その運動はその闘争戦略—耕作されていない大農園の占拠—によって、ルラ大統領の前のフェルナンド・エンリケ・カルドソ政権に厳しく迫害され、大手マスコミや大規模私有地の守護者である上流階級からは犯罪者のレッテルを貼られてきた。その意味で、労働党政権の成立は、その運動を犯罪視することなく対話と交渉をもたらし、農業の構造改革を実現する可能性が生まれたことを意味していた。ルラはその出自からこの運動に大きく共感していたし、大統領となってからも農業改革とMSTに敬意をもって対応する意図を明確にしていた。

しかし、そうした約束や期待にもかかわらず、ルラ政権下では農業改革のために収用される大農園の数は年を追うごとに減少していった。1988年のブラジル憲法では、私有地の社会的機能は、都市域にあっては個人主義的な所有を人間の尊厳を守るための所有に移行させること、農村域にあっては労働権と環境権を保護することに重きが置かれていた。農

村部の土地所有者は持続可能な発展を果たさねばならず、それを実施しても、公的有用性を広めなければ政府に収用されることもある。それが面積に応じた生産や使用人数のない私有地のたどる道である。民政移管後の政権にとって、都市部の私有地の社会的活用を促進することは重要な課題であり、ルラはその出自とMSTとの近さから、その要請に応えるのに最も適していたと考えられている。しかし、ルラの2期にわたる政権での土地収用数は、前任の社会民主主義のフェルナンド・エンリケ・カルドソ政権下と比べてはるかに下回った。カルドソ政権の3532件に対し、ルラが収用した私有地はわずか1990件にすぎない。

土地収用の曲がり角は2005年に訪れた。この年から、家族農業のために分割される大規模私有地の数はどんどん減少した。偶然か否か、同じこの年に、遺伝子組み換えの種子による農業生産を合法とする大統領令が発令された。モンサント社の大豆の種子は1998年以降にアルゼンチンからブラジルに密輸され始め、この大統領令まではまったくの規制外だった。今日、遺伝子操作された種子はブラジルの大豆生産全体の85%を占めるとみられる。その割合はもっと大きいかも知れない。これらの種子は伝播力が高く、厳密に統制することはおそらく不可能だからだ。

アジア向け輸出の増加と一体となったこれら二つの要因は、巨大なアグリビジネス企業に特に大きな恩恵をもたらした。ブラジルは巨額の貿易収支によって、国内的にも国際的にも真の社会革命を起こしているというイメージを持たれるようになった。そしてその間、下院と上院で農業輸出企業の利益を代表している地方選出議員は労働党政権への影響力を強めていた。農業改革は手つかずのまま、そしてMSTは忘れ去られた。

だが、このような数字はあてにならない。生産量増加や国際社会におけるブラジルの存在感の上昇は

都合の悪いデータを覆い隠しているからだ。土地所有者の10%が生産の85%を握り、耕作地の85%がトウモロコシ、大豆、牧草、サトウキビ栽培に向けられていること、つまり、家畜の飼料生産や輸出、あるいはエタノール燃料に向けられているのだ。サトウキビ生産は歴史的に植民地時代の奴隷制と結びついてきたが、ルラによって石油燃料への過度な依存に対する偉大な解決策として推奨された。そこでは、サトウキビが広範囲かつ継続的に栽培されると土壌を破壊し、生態系の劇的な変化をもたらすということが言い忘れられていたし、同じように、サトウキビ農園では労働者は最も非人間的な条件で雇われており、奴隷や子どもも含まれていることの指摘もされなかった。

ジルマ政権：貧困撲滅か

アグリビジネスへの全面支援か？

ジルマ・ルセフが権力の座についた時には、社会運動はもっと冷めた受け止め方をした。それでも、彼女の大統領就任は、初めての女性大統領であることと、独裁時代の専横に対し闘った元ゲリラであることからより大きな変革を象徴していた。職務に対する厳格さで知られ、誠実なイメージもあって、ルラの「娘」というべきジルマは選挙に勝利した。それは、対立候補の強権的なジョゼ・セーハ（PSDB）に代表される右派の復権を恐れたすべての左派勢力が団結した結果でもあった。

ルセフ政権の第一の旗印は貧困撲滅と国の発展だ。これらは「貧困なきブラジル」と「成長加速計画(PACs)」という二つの省庁横断的なプログラムを通じて実施されている。「貧困なきブラジル」は政策資源の47%を農村部に集中する。基本的には家族農業への助成を通じて、原材料や農業機材の購入によって減った基金に財政利益を生みだそうとするものだ。食料買い取りプログラム(PAA)は、連邦政府が福祉施設や病院、大学、刑務所などでの消費やストックのために生産物を購入することで家族農業を育成しようとする。さらに、プログラムは上水道へのアクセス拡大も当てにしている。

去る3月8日、大統領は家族農業の発展のための政策を宣言した。家族農業はブラジルで消費される食料の70%を支え、主食産品はすべて連邦税を免除される。これにより、食料(肉、全乳、卵、米、フリホール、パン、野菜、豆類など)のコストは9.25%下がり、トイレットペーパー、石けん、歯磨き粉は12.25%下がることになる。より下層階級の主要な消費を可能とするのに加え、小規模なコミュニティでの商取引を活性化させようとする。

これらのすべての政策は、もちろん歓迎されるものではあるが、ジルマが誇る「農地革命」はどこまで本物なのだろうか。農業改革の実現を繰り返し約束してはいるが(3月初旬の地方労働者との集会で約束したのがその最後だが)、すでに任期3年目の半ばになろうとしているジルマ政権は、農業改革のための土地収用件数は今のところ歴代最下位だ。農地分割目的の大規模私有地の収容数は86件で、彼女を下回るのは90~92年の大統領、フェルナンド・コロール・デ・メロだけだ。彼は市民の貯蓄を没収する経済政策と汚職で政権を追われ、収用した大農園の数はわずか28件だった。ちなみに、この元大統領は現在上院議員で、ジルマの最大の支持基盤となっているのである。

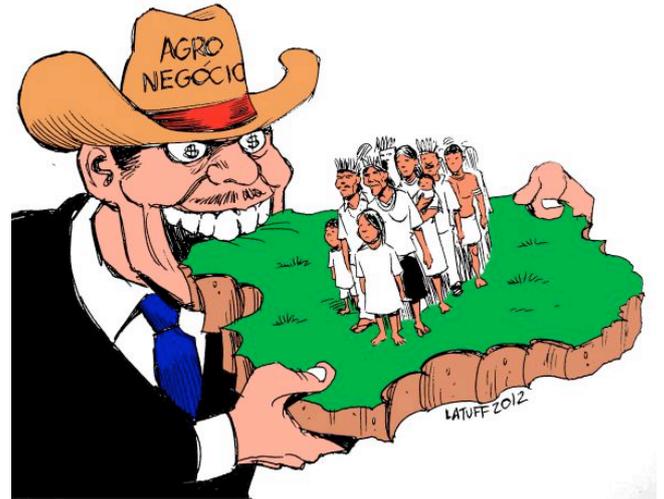
議会と言えば、ジルマ政権になってからの地方選出議員の影響力の著しい増大も無視できない。2012年、この議員グループは地方の社会運動、環境主義者や先住民族への侮辱とも言える森林法案を通過させた。その立法は炭素クレジットと環境保全地域での割り当てを投機市場に置くことを認め、ブラジルのアマゾンにグローバリゼーションの道を開いてしまった。非耕作大農園の所有者たちは、環境保全の割り当てに応じた炭素クレジットと相殺するという名目で、所有地の社会的機能を正当化できるようになった。土地を農業生産に使う場合、それは森林伐採を意味するのだが、その1割に満たない面積の代替地を植林するだけで埋め合わせできるようになった。加えて、大規模私有地は家族農業のために土地を収用されなくて済むことにもなった。家族農業にはアマゾン熱帯雨林の未耕地に490万ヘクタールが割り当てられ、それによって非耕作大農園には手を

触れることなく、さらに、森林伐採を行う私有地にはペナルティを科されないこととなった。

提案者の大半が与党議員だったために、この立法には反対する勢力がなかった。社会運動や環境活動家たちは、大統領が拒否権を発動して、法案を完全に拒否することを期待していた。しかし、大統領は新法の九つの条項を禁じただけで、残りは通してしまった。これにより、森林を伐採している地方の私有地は、破壊した地域で回復計画を提案するという条件で罰金を免除されることになった。その回復とは、伐採面積の20%以内を対象としていればよく、国土の中西部と北部地域の私有地の多くが元々はアマゾンを開き開いたものであることは考慮されなかった。

このように環境面ではルセフは大農園の権力拡大を許すなど容認したが、先住民族の権利に関してはさらにひどかった。ブラジル政府はルラ政権以降、ラテンアメリカで最も多くの先住民族の土地の境界を決めてきたと宣伝している。だが、これらの土地がアマゾンや都市部周辺、つまり土地境界問題が少ない地域にあることは言及されない。アグリビジネス向けの大土地がある地域に暮らす先住民族は、実際には保護地域の境界画定という要求を無視され、大農園の監督者による日常的で民族の存亡を危うくするほどの暴力に苦しんできた。その典型例として、マツ・グロッソ・ド・スル州のグアラニー・カイオワ民族は2012年、殺害されたり、強かんされたり、自殺に追い込まれたりする中で、州政府令により先祖伝来の土地から強制的に立ち退かされた。また、家族農業を基本とする食料生産のための農地プロジェクトと、大規模プランテーションでの輸出用作物の生産プロジェクトの間の関係は公正とはほど遠い。アグリビジネスは政府内で大きな影響力を持ち、家族農業とは比較にならない多額の予算が向けられている。

大統領は今年2月、2013~14年の農業計画で1330億リアル(約5兆9,226億円)を投資すると表明した。その額もさりながら、その内訳はさらに強烈だ。家族農業向けが180億リアル(約8020億円)だけなのに対し、1150億リアル(約5兆1245億円)もがアグ



リビジネスに向けられる。この予算は基本的に生産近代化のための機械購入に投入される。あるアグリビジネスのためのフェアで、ルセフ大統領はまだ十分な予算があると強調した。「費した分だけ政府がカバーする」と。その数日後、大統領は再び農業輸出業者たちをもてはやした。「2013年にブラジルは1億8500万トに及ぶ史上最高の穀物の収穫を得るだろう」と自慢気に宣言したのだ。もちろん、この収穫とは輸出用穀物のことだ。

もしジルマが家族農業と地域の経済を保護・奨励したいのであれば、そしてそのために基本食物を非課税にして小規模生産者の収穫を買い取るのであれば、なぜ農地改革を行わないのだろうか？ 大農園の非耕作地を収用することが事実上できなくなる森林法をなぜ通してしまうのか？ あるいはなぜ大農園に対して過剰な投資を行うのか？ なぜ先住民族を守り、土地への権利を保障しようとならないのか？ 労働党政府は、その国家プロジェクトにおいて家族農業は国家の発展とグローバリゼーションへの参加を妨げない限りにおいて認められるという態度をとっている。「富める国とは貧困のない国だ」というジルマ政権のスローガンは、ブラジルの国際的格付けを上げ、消費者という巨大な総体を生み出すために有効だ。だが、ジルマの富める国とはどこまで、ルラ政権のスローガンのように「すべての人々の国」と言えるのであろうか？ (訳=太田裕之)

<http://www.cipamericas.org/es/archives/9341>より

ニカラグア 女性にとって危険な国

ラウラ・カールソン

私たちの多くはすでに、シウダーファレスでの若い女性達の殺人事件や、コンゴでの集団レイプによる大量虐殺事件について聞いたことがある。注目すべきこれらの事件について、犠牲者の状況は、少なくとも一般的に知られてはいる。何年もの間、ニュースになっているにもかかわらず、政府やNGOが、現実的な対策プログラムを実行できないのに対して、私たちはいつも失望させられてはいるが。市民主催の、あるいは公的なフォーラムは、これらの犯罪が深刻なものであると我々に気づかせてくれるし、また、これらの問題を何とか打開しようという意図も見える。

もし世界がもっと早くこれらの犯罪とまともに向き合っていたら、多くの女性が殺害されずにすんでいただろう。社会としての私たちは、女性に対する暴力が増大しているという警告に耳を貸すことができないことが少なくない。この問題に対する関心が不足しているために、被害女性たちの悲痛な証言をきくまでは、行動を起こすことができないのだ。危機に対して無関心でいることは、犠牲になった女性たちや潜在的な犠牲者たちから、彼女らの権利を主張する声を奪ってしまう。

現在ニカラグアでは、女性たちの組織が抗議のために決起している。今年3月12日、ワシントンでの「米州人権委員会（IACHR）」で、同ニカラグア報道官のローズ＝マリー・アントワーヌは、ニカラグアでは、「非常な勢いで性暴力が増え続けている、とても容認できない」として、「国がもっと防止対策に力を入れる必要があるのは明白である」ことを強調した。

予防対策の欠如と、いくつかの暴力犯罪への政府の加担は、「女性と子どもに対する性暴力についてのIACHR公聴会」＝写真＝で、ニカラグアの女



性組織の代表者達が明確に報告している。弁護士で「ニカラグア自主女性運動（MAM）」の代表でもある、アサレア・ソリスは、ニカラグアでは女性に対する暴力の加害者を「擁護しようとする気風がある」こと、そして2012年にあった85件の女性殺害のうちわずか27件だけが犯人逮捕に至り、4件のみが禁固刑となった、と明かした。被害女性のうち13人は、政府に対してすでに告訴していたが、事前保護対策がとられていたら、彼女たちの命を救うことができたであろう。

ソリスは、憂慮すべき二つの傾向を指摘した。女性に対する性暴力事件の増加と、その内の少女に対する発生率の高さである。さらに、報告されている性暴力犯罪の84パーセントは、17歳以下の幼女や少女に対するものである、と述べている。

さらに、「この5年間の状況は、同じではない。ニカラグア政府による断固とした対策が取られないまま、さらに悪化している」。法律上は、特に女性に対する暴力に関する完全法ができたことなど、実質的前進があったにもかかわらず、「申し立てを増やし無処罰を減少させることができたであろう法の改善は、警察の作為や、司法の判決によって台無しにされてしまった」と、ソリスは語っている。また被害女性たちが訴え出ても、警察の屈辱的な言動に

よって、セカンドレイプを受けたり、また当局によるいやがらせや軽視により、精神的に追い込まれると、述べている。

ソリスは、性暴力がどのように政治暴力に組み込まれているかということについては、極めて深刻な状況だと指摘し、2012年11月の例を挙げた。それは地方選挙の時の不正行為について、与党に対し抗議していた若い女性のグループが、逮捕され拷問され、レイプするぞと脅された事実だ。今日にいたるまで、事実に対して一切の調査もされておらず、しかもその他のケースでも警察は権力を悪用し、犯罪者を擁護している。「私たちは、この問題を政治化していると非難されている。しかし本当は、正義の欠如が性暴力を増大させているのであり、ニカラグアでは、腐敗と無処罰の問題は深刻である」と述べた。

マルタ・マリア・ブランドンは、政府が母体保護のための人工妊娠中絶をも禁止したため、レイプの犠牲になった少女たちが、危険度が高い状態でも妊娠を続行させられたと委員たちに語った。刑法では14歳以下の少女との性行為は合意によるものとは見なされていないにもかかわらず、10歳から14歳の年齢の母親から生まれた1453例の出産のうち、人権活動家の知る限りにおいては、取り調べられたり、告訴されたケースは一つもない。

女性の権利に関する専門家であり、MAMのメンバーでもあるヴィオレット・デルガドは、性的人身売買を撲滅するために政府諸機関が出している成果と、申し立て、取り調べ、量刑判決等の実績、との間に大きな隔たりがあると指摘する。「情報へのアクセスはほとんどなく、これらのケースが偏見や不適切な扱いを受けることが、例外的というよりは常態になっている」と、公聴会で述べた。

デルガドは、国内の人身売買についてのメディアの報告や記事の多さを指摘している。拉致された女性の大多数は売春をさせられ、その他の女性たちは



麻薬の運び屋をさせられている。人身売買については、政府内の腐敗がその犯罪をいっそう容易にしている。

政府が効果的な対策を講じないことに対して、暴力の被害者サポートを立ち上げたのは女性組織だった。デルガドは「女性たちの声が市民に届くよう、支援事業を創設する資金を調達し、正義を求めて闘かう女性たちに寄り添う心理学者や弁護士などの人的資源を獲得しているのは、市民社会からたちあがった組織だけだ」と断言し、支援組織は50以上、避難所は11あるが、政府によるものはたったのひとつしかない、と指摘した。

IACHR（米州人権委員会）の公聴会で、女性たちは「ニカラグア、女性と子ども」の委員たちの訪問を呼び掛けた。ソリスは、「今日国際社会と各国の女性たちができる一番重要な貢献とは、この問題に光を当てることです。女性への人権侵害と犯罪に関して政府が果たす役割を検討するためにも、ニカラグア政府の態度がどうなのかは、[人権擁護団体の]活動のひとつの要とするべきなのです」と述べている。（訳＝大西裕子）

ラウラ・カールソンは、メキシコシティに拠点を置くCIP—Programa de las Américasのディレクター。テキストは<http://www.cipamericas.org/es/archives/9255>より

ニカラグア便り (1) 子育て 田中紀子

ニカラグア(以下「ニカ」とします)に住んでかれこれ16年になります。どうしてニカに住み着くようになったのか、いきさつを説明するより、「若かったから」と答えることが多くなっています。現在は首都のマナグアに住んでいます。ニカに慣れてしまったのか、不思議に思うこと、新鮮に思うことは日に日に減っている気がします。そんな中、最近日本のテレビ局から、海外のことを紹介する番組を作るための依頼を受けるようになり、さまざまな質問を見る度に、分かり易いテーマが多いにも拘わらず、答えられない自分に気がつきます。例えば、「日本ではバスや電車など時刻表は1分単位ですが、あなたの国では時刻表は何分単位ですか?」といった類の質問であります。

答えられないということは、確かに、興味というものを失って慣れた生活を送っているということかも知れませんが、いろんな事を見過ぎてしまったために、日本人が期待するような分かり易い一言で答えられないということもあります。分かり易くステレオタイプを出してしまうと、「えー、そうなんだー」で片付けられて、情報として消費されていくのかと思うと、悲しい気がするからです。他方で、ある国を全く知らないに人に、初めての入り口情報を発信することは悪くない、とも思います。だからこそ、日本のテレビ局から来るそういった質問にろくに答えもしないけれど、「もう送って来ないください」宣言もしてません。今回「そんりさ」に書くのを引き受けたのもそんな気持ちからです。

前置きが長くなり申し訳ありませんが、テーマを決めるのも前置きを書いている間にした作業で、何とか書けそうなのが、やっぱり子育てのことでしょうか。2007年の10月生まれの現在5歳、後3ヶ月で6歳の男の子を育てています。

子供が5ヶ月の時に初めて日本に連れて行きました。家の外で準備するのはややこしい離乳食もなく、動き回らないので危険も少ない時期というのは利点でしたが、授乳とオムツ換え、あやす、の作業をとにかく必死にやっていた時期だったという記憶があります。それで、日本に行った時に強く感じたのが、ああ、子育てはニカの方が楽、というひとことでした。ちょっと外出すると、まず、探さなきゃ行けなかったのが、授乳室・オムツ換え場所のマークです。デパートなんて隔階にしかそういうマークがないところもあって、そこに「辿り着く」のも子供を抱えて荷物も持ってとなると楽ではありませんでした。「とにかく他人に迷惑かけない」が徹底した文化では子供の泣き声も気になって抑えなきゃ、せめて、泣き止まず努力をしますということを示さなきゃいけないという圧迫感があったのを覚えてます。

そういう面ではニカでは授乳やオムツ換えは公共の場所でも、ちょっと憚ってやれば、誰も気にしません。赤ちゃんが泣くのは当たり前で、騒音に対する寛容性は日本人に比べたら、信じられないくらい大きいので、その点でも気が楽でした。大家族が多いから、お母さんたちも子育てを独りでがんばらなきゃいけないということも少なく、子育てノイローゼというのは少ないと思います。また、大家族だから子供に接する機会が自然にあって、子供という存在に対する寛容性も社会的に大きいのではないかという気がします。子供のことでちょっとくらい他人に迷惑かけても大丈夫、という安心感があります。

さらには、子供連れじゃなかった時代にはつっけんどんだった銀行のお姉さんや化粧品売り場のおばちゃんが、子供を連れて行ったとたん、きゃあきゃあ

あ話しかけてきて、いまだに、たまに私を見ると、子供は元気？ と聞かれることさえあります。

だからといってニカでの子育てが楽勝かと言うと決してそんなことはありません。うちの子が生まれた2007年はニカは停電の年で、毎日長時間の停電が一年中続いた年でした。まだ授乳にも慣れていなかった頃、授乳中に停電すると、身動きできず、懐中電灯やろうそくをつけることもままならず、年から年中暑いニカで扇風機をつけることも出来ず、暗闇で子供が満腹するまでじ〜っとしているしかなく、とにかく、しんどかったのを覚えています。子供がいると洗い物が多いので、断水すると、実際の問題よりも不安の方が大きく、ストレスに感じたものです。ニカ人にも、良く言えば親切、悪く言えばお節介な人たちがいて、子供の世話の仕方や離乳食のことでいろいろ納得いかず、あるいはこちらの方針を理解されていないという葛藤を感じたこともしばしばありました。

赤ちゃんから成長して「子供」になると、しつけの問題になってきて、これはニカでも意見は様々です。傾向としては体罰はする必要はない、という現代的な意見の人が増えているとは思いますが、ちょっと昔の人、とは言っても、30代40代の人でも、自分たちが子供の時代には、しつけは厳しく、体罰は当たり前（これは他人に迷惑かけない精神というよりも、年上の人間の言うことには従う方針で、結果として他人に迷惑かかっていなかったのだと思います）、今の子供たちは甘やかされ過ぎ、という人もいます。公共の場で体罰をするお母さんを見たこともあります。面白いのは、その場面を見ても特に誰も驚かないようです。（しよっちゅう見る光景ではありませんが）そもそも子育てノイローゼのお母さんが少ないから体罰が大きな問題にもなっていないという背景があるのかも知れませんが。私的には、自分の経験と周りの人の様子を見て、基本的



には甘やかさないの方針に傾いている今日この頃です。

最後に言葉に関する話です。こちらに住む日本人のお母さんは、大使館や国際協力関係者の方がもちろんいるので、この先も外国に転々とする可能性を考えている人が多く、バイリンガル、或いはトリリンガル教育を良く考えてらっしゃるようで、関心したものです。うちの子は、私以外に日本語に接する機会がないので、最近私の言うことが分からないと、スペイン語で何て言うの?! と、当然のように返されます。去年の11月に日本に連れて行った時は、小学6年生になる私の姪が自分の小学校で特別行事にうちの子を連れて行ってくれました。その時、姪の同級生にあれこれ話しかけられて、口は頑なに閉じたまま、ひたすら首を縦横に振って答えたそうです。何となく言ってることは分かるけれど、日本語で返事をする自信がなかったのでしょう。まあ、日本語に関しては大きな期待はせず、プレッシャーもかける気はありません。言葉は大人になってから学びたいければ自分で学ばばよい、それより、アイデンティティーのしっかりした人間になってほしいと思います。来年はもう小学生。同級生や近所の友達との付き合い、仲間意識、そんなものを大事にしてほしいと思っています。

日本ラテンアメリカ子どもと本の会 (CLIJAL)の活動から 国境を越える子どもたち

小高利根子 (ポルトガル語翻訳者)

「日本ラテンアメリカ子どもと本の会(CLIJAL)」についてはこのシリーズの第1回目で詳しく述べましたが、この会の活動の目的として私たちは次の3項目を挙げています。

- 1) 日本の人びとに、ラテンアメリカの文化や人びとのことを伝えていく。
- 2) 日本にくらすラテンアメリカ出身者やその子どもたちが、出身地のことばや文化を大切にできるような環境作りに協力する。
- 3) ラテンアメリカ出身者と日本人が互いの良さを認め合い、ともに生きていける社会づくりに貢献する。

実際の活動としては、日本で出版されているラテンアメリカ関連の児童書を会のメンバーで読み合い、推薦できる本を選ぶことから始まりました。1年半ほど選書会議を重ね、108冊の選書リストが完成。これらの本を展示する図書展の企画も同時進行で進めました。

本を見てもらいたい対象者は、ラテンアメリカ・ルーツの子どもたち、その家族、学校の先生と級友、地域の図書館関係の方々など。どんな本であるかの説明は、日本語、ポルトガル語、スペイン語の3カ国語併記がどうしても必要になってきます。図書展開催の準備の中で一番大変だったのは、この書誌作成の部分ではなかったかと思います。

最終的にはB5版の用紙に3カ国語の書誌に加えてカラーの表紙写真、国旗、国の地図がついたものが出来上がり、それをプラスチックケースに入れてそれぞれの本の横に置くことができました。

会場内での本の並べ方としては、まず大きく地域で分け(中南米全体、北米、中米、カリブ地域、南米)、その中で国別に並べるとというのが、一番自然

な形でしょう。ただ、私たちはそれとは別に、展示の最初に特別なコーナーを設けました。それが「国境を越える子どもたち」のコーナーです。

私たちが選んだ本の中に、親の移民、亡命その他の理由で国境を越えなくてはならなかった子どもたちについての本が15冊ありました。親たちにははっきりした夢があり、目的があり、あるいはやむにやまれぬ事情があります。でも、子どもたちはどうでしょう？ 好むと好まざるとにかかわらず親について行く以外に選択肢はなかったのです。異文化の中に突然ほうりこまれた子どもたちの、大人とは違ふとまどいや苦しみがこれらの本から伝わってきます。

今、日本に住んでいるラテンアメリカ・ルーツの子どもたちはいわばそれと全く同じ状況にいるわけですから、私たちが「国境を越える子どもたち」というコーナー=写真=を設けたのはごく自然な発想だったと言えるでしょう。

この15冊の中にはメキシコからの季節労働者としてアメリカにやってきた家族と図書館員とのふれあいを描いた『トマスと図書館のおねえさん』や難民としてやって来た街での違和感を絵本的に巧みに表現した『エロイーサと虫たち』などがあります。

その中の1冊『さよならブラジルー国籍不明になった子供たち』(ルイス・プンテル著)に私がブラジルで出会い、翻訳をしたのは1989年のことでした。軍政時代のブラジルから父親の政治亡命のためにまずチリへ、それからフランスへと「国境を越えた」少年の物語です。言葉のわからない国で教室に座っていなくてはならないつらさ。生活に慣れて言葉もわかるようになったら今度は「自分は母国ブラジルのことをなにも知らない…」というアイデンティティの問題。恩赦の発令で帰国が可能になったときには、親しい友人や恋人とのつらい別れ。……



様々な経験を重ねて少年は成長し、「自分のせいで家族を犠牲にしたのでは？」と悩む父親に「自分の意志を曲げなかった父さんを誇りに思っているよ」と告げます。

この本を翻訳した時点で私の頭にあったのは「サンパウロ日本人小中学校」その他海外の日本人学校に通う子どもたち（自分の娘を含めて）のことでした。原作はブラジルの学校の課題図書で対象年齢は「中3以上」とされていたのですが、海外に住む子どもたちならもっと下の学年でも自分の境遇と重ね合わせ共感を持って理解してもらえるのではないかと思ったのです。

「小学校高学年の子が読めるように漢字にはルビをふり、でも、大人が電車の中で読んでも恥ずかしくないような、あまり子どもっぽくない表紙に」という私の注文を出版社は全面的に採用してくれて本は出来上がりました。そしてサンパウロ日本人学校の図書館に置かれたこの本を、本好きの子なら小学校4年生くらいから十分読みこなしていました。

「亡命」と「親の転勤」とでは社会的な立場も経済的な状況も心理的プレッシャーもまるで違いますが、自分の意志とは関係なく無理やり連れて来られたという点では同じだと言えるのではないのでしょうか。

その後、1990年の入管法改正と共にブラジルやペルーなどから単身で出稼ぎに来ていた日系人たちが家族を呼び寄せるようになり、定住者も増えて、ここ日本でも「国境を越えた子どもたち」の数が急増することになったのです。

ブラジルでは軍事政権の時代（1964～1985）に政治亡命した人々の数は22年に及ぶ全期間を通じても数千人の単位だったと言われています。ところがその後民政移管してから経済的理由で他国へ「出稼ぎ」に行った数は数百万人の単位と報道されています。人間は何よりも経済的な動機で流動するものだとつくづく思われます。今後もこうした流動が続く限り、「国境を越える子どもたち」は減ることはないでしょう。

私はブラジルで出会った一人の日系二世の青年の言葉が忘れられません。「ぼくはブラジルではニホンジンと呼ばれ、日本に行ったらブラジル人と言われる。実際、ブラジルで日系コロニア社会に生きてきたぼくはブラジル人としては70%かも知れない。日本人としても70%かも知れない。でも、お陰でぼくは140%の人生を生きられると思っている」という言葉です。

今、日本に住むラテンアメリカ・ルーツの子どもたちが、祖国に誇りを持ち、日本に生きることをプラスと考えて、より豊かな「140%の人生を生きている」と感じてくれたら、どんなにすばらしいことでしょうか。そのためのお手伝いをCLIJALの活動を通してわずかばかりでもすることができたら、と願っています。

*選書リスト108冊の書誌はCLIJALのブログ(<http://clilaj.blogspot.com>)に順次掲載中です。

第67景 モンカーダ60周年に思う

カリブ海の社会主義国キューバは7月26日、革命（1959年元旦）の原点となったモンカーダ兵営襲撃蜂起の周年記念日を迎えた。1953年のこの日、青年弁護士フィデル・カストロの率いる中産層の青年たちが武装して、兵営と他の2ヶ所の標的を急襲した。フルヘンシオ・バティスタの軍事独裁政権を倒すための決起だった。

だが失敗し、多くは捕えられ拷問され殺害された。カストロ兄弟らは裁判にかけられ、有罪となって、ピノス島（青年の島）の刑務所に収監された。だがバティスタは、社会の圧力を受けて55年5月、カストロ兄弟らを恩赦で釈放する。兄弟らは亡命先のメキシコ市で集結し、革命を目指し訓練する。チェ・ゲバラは、同市でキューバ人の同志となった。

56年11月、クルーザー「グランマ」号でメキシコ湾の港を発った82人の志士は12月2日、キューバ東部の海岸に上陸した。ここにキューバ革命戦争が始まった。

壊滅を辛くも免れた約20人は、東部海岸に連なるマエストラ山脈に入り、拠点を築く。革命戦争はゲリラ戦から最終局面の通常戦争を経て、59年元旦終結する。25ヶ月間の戦いだった。モンカーダ兵営襲撃からは5年5カ月と5日経っていた。

キューバ革命は、20世紀ラ米史上最重要の出来事として、ラ米史と世界史に刻み込まれた。

フィデルは、モンカーダ兵営襲撃、グランマ遠征、マエストラ山脈立て籠もりを「革命の3大偉業」とし、すべてに参加した者に「革命司令官」という最高級の名誉称号を与えた。チェもカミーロ・シエンフエゴスもモンカディスタ（モンカダ兵営襲撃参加者）ではなく、この称号は持たなかった。

現存する革命司令官は、カストロ兄弟、ラミ

ーロ・バルデス副議長、および例外的に称号を与えられたギジェルモ・ガルシアだけである。ガルシアはマエストラ山脈でフィデルを支援した農民の代表で、その貢献度の高さから特別に革命司令官として認められたのだ。重要な革命司令官だった黒人フアン・アルメイダは先年死去した。

フィデルは革命軍最高司令官だったため、革命司令官の称号は用いない。弟ラウール・カストロ現国家評議会議長は革命直後から長らく革命軍相（国防相）で、陸軍大将であるため、やはり革命司令官の称号は使わない。

この称号で呼ばれるのはラミーロとガルシアだけである。ラミーロは革命戦争中、チェの副官で側近だった。1998年にチェの遺骨がボリビアで見つかり、ボリビアに赴き遺骨を持ち帰ったのはラミーロだった。ガルシアも、要職をこなしてきた。

3大偉業に参加した3人とガルシア。21世紀第2・10年期[※]のいま、革命は記憶の遠い彼方にある。だが革命体制は依然健在で、四苦八苦ししながら延命に努めている。フィデルは60周年記念日をどんな心境で迎えたのか。ラウールは、ラミーロは。

私が取材を通じて関与し、私の人生と同時並行的に進んできた唯一の革命と革命体制が、キューバ革命とその体制である。革命も指導者も、そして私も年老いた。キューバに雪は無縁だが、「風雪の歳月」は幾ばくかの感慨を誘う。

※編註…第2・10年期（2010～2020年）

【お知らせ】

月刊LATINA8月号（7月20日刊）に、伊高浩昭執筆「ラ米乱反射第90回」 変化求める若者の洪水でブラジル全土が氾濫 行き詰ったPT政権の「改良型新自由主義」が掲載されています。

音楽三昧♪ペルーな日々 (第50回)

水と人魚とハサミ踊り

今回は、永らく虐げられていた儀礼舞踊ながら、今やペルーの文化遺産として大きな変化の只中にある「ハサミ踊り(ダンス・デ・ラス・ティヘラス)」について見てみたいと思う。

この踊りはペルーの中部アンデス地域(アヤクチョ、ワンカベリカなど)の特定の地域の農業儀礼の中にみられる特殊な踊りだ。その起源は今なお謎に満ち、踊りも、音楽や衣裳も、他のアンデス文化のものとは異なる特色を持つ芸能である。日本人で唯一その舞手として活動している友人は、ハサミ踊りを指して「踊る格闘技」と呼んでいた。また、その音楽や踊りが演奏される場は極めて呪術的な場であり、その舞手(ダンスック)や弾き手たちもアンデスの精神世界と密接に関わりながら存在している、まさに秘技的芸能なのである。彼らの多くは、さまざまな神秘体験を経験している、というのもまことしやかに語られるハサミ踊り譚である。

私自身もハサミ踊りに憧れて、2001年にアヤクチョ県アンダマルカ村にハサミ踊りが踊られる祭りを見に行ったことがある。普段は若者が出稼ぎに出てしまった寒村に、多くの帰省者や観光客がバスで押し寄せ、祭りの日は一気に盛り上がる。アルパとバイオリンを引き連れたダンスックたちのハサミを打ち鳴らす金属の甲高い音色と妖艶な音楽が遠くから聴こえてくる、それだけで胸が激しく高鳴ったことを今でも思い出す。

「ハサミ踊り」は、永らく悪魔の踊りとして教会から攻撃されていたが、近年観光資源化が進み、積極的にペルー文化を代表する存在として認識が大きく変化した。文学作品の中では、ペルーの先住民文化を描き出した作家、ホセ・マリア・アルゲダスの短編「ラス・ニティの最期」がハサミ踊りを扱った作品として有名だ。その中では、ハサミ踊りの舞と山の精霊ワマニの関係、そしてそれが舞手の死と越えて受け継がれる瞬間の独特の世界が描き出されている。



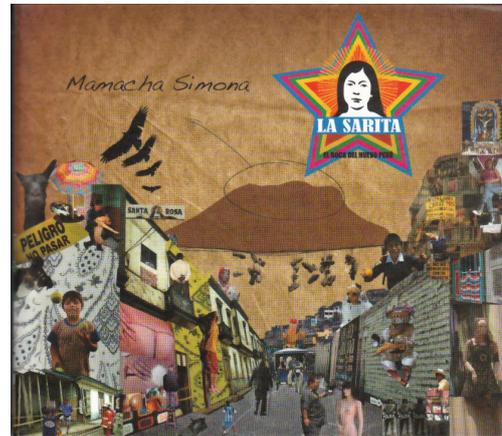
そもそもハサミ踊りという名前の起源となっている「ハサミ」とはダンスックが踊りの中で使う2枚の鉄片を指す。その鉄片は細長い板の先が弧を描いてハサミの柄のように指を入れられるようになっている。この2枚を交差させるように右掌の上に軽く持つスタイルがハサミを持っているように見えることからハサミ踊りと名付けられたと言われている。ちなみにこの2枚の鉄片をハサミのようにつなぐ要は存在しない。

1830年ごろのハサミ踊りの古い絵の中では、実際にハサミを使って踊っている絵が描かれているものもある。しかし、この2枚の独立した「ハサミ」を右手を揺らして打ち鳴らしつづけながら踊ることがハサミ踊りのスタイルなので、2枚の鉄片を要で留めて実際のハサミ状にしてしまうと打ち鳴らして音を出すことが出来なくなる。そのため、少なくとも現在のスタイルから考えると、ちょっと素直に昔は本物のハサミを使っていてね…とは言い難い。

ハサミ踊りの魅力とは何か、といえば、その一つは超絶的なサパテオ(ステップ)の応酬で競われる踊りのコントラプト(競技)であり、また、その果てに訪れる「トランス」によって精霊が舞い降りた(憑依した)後のダンスックが見せる超人的パフォーマンスでもある(これは正直、苦手な人が多いと思う)。また、音楽的にも特にアヤクチョのハサミ踊りの音楽は他のアンデス音楽とも全く異なる妖幻な魅力

に満ちた心揺さぶる音楽である。ハサミ踊りの音楽はアヤクーチョとワンカベリカの2つのタイプがあるが、それぞれ全く異なっているのが面白い。近隣のアプリマックやアレキパなどでもかつては踊られていたが、現在はほとんど見られなくなってしまったので、その音楽がどのようなものなのかは知らない。しかしともかくアヤクーチョのハサミ踊りの音楽は、心躍りかき鳴らさずにはおれない音楽なので、ぜひ聴いてみて欲しい。そして、もう一つ特徴的な魅力としてあげられるのが、その衣裳だ。仮面をつける踊りの多いアンデスの踊りの中で、ハサミ踊りは逆台形のような不思議な帽子をかぶり、顔をスカーフで半分隠したスタイルで踊る。靴はなんと飾り立てたスニーカーである。多くの場合芸名がその衣裳に縫いこんであり(そう、ダンサックはそれぞれ固有の芸名を持っていることもその特徴だ)、色とりどりに飾り立てられたこれまた特殊な衣裳を着ている。このようなアンデス文化において唯一無二のスタイルに彩られながらその起源の不透明性がこの踊りをさらに神秘的なものへとしている。

また、その宗教的側面からダンサックは匿名性が求められ、そのため先程も触れたように本名や顔を隠して芸名で踊られる。基本的には2組のダンサックが交互に踊りを披露しながら徐々に複雑なスタイルへと発展していき、精霊(人魚、水の精を中心とする山の精霊)が宿ったとされた後は、体中に針を突き刺したり剣を呑んだり蛍光灯を食べたり、綱渡りをしたりとその超人性を披露する。ここの部分は若干、いやかなりグロテスクなところもある。そもそもこの踊りは弟子入りして行われるスタイルであったが、近年注目される中で、リマなどでも踊りを教える学校が出来たり自分でビデオを見て練習する若者が登場し、ついにはコンクールが開催されるようにまでなり、これまでとは異なるスタイルでの「踊りの発表の場」が増えていることも確かだ。しかし、基本的にハサミ踊りは呪術的な舞踊であり、「水のまつり(ヤク・ライミ)」などの農業歴に則った祭りや特定の人生儀礼の中で踊られる。特に豊作を祈願する水のまつりでは、トウモロコシの播種前に畑の水路の掃除が終わった段階で行われ、ハサミ踊りによってその年の豊作を祈願し、占う側面もあ



る。そのため、彼らは祭りの前や重要な時には滝と対峙して踊ることが求められるという。水の精霊とそのようにして常に向き合い、その精霊の内なる声を聞きながら舞う舞が、ハサミ踊りなのである。

さて、そんなハサミ踊りが近年ペルーの都市の若者文化の中に取り込まれている例がある。最後に3つほど面白い事例を紹介して終わりたいと思う。

一つは90年代頭に結成されたウチュパと名乗るケチュア語ブルースを歌うグループだ。ハサミ踊りの衣裳をまもってケチュア語でメイド・イン・ペルーのブルースを歌う彼らの姿はリマの若者たちに大きな衝撃を与えてきた。

そしてもう一つが、90年代末より活動しているラ・サリータというフュージョン・ロックバンドだ。ケチュア語とスペイン語を使い、ロックやレゲエ、クンビアなどにハサミ踊りやワイノのテイストも織り交ぜて新たな音楽の地平を切り開く彼らの音楽は一聴の価値がある。これまでのアンデス都市音楽とはまた違ったパワーのある魅力に満ちあふれている。

そしてアヤクーチョのワイノ歌手サイワの娘ダマリスの歌うアンデス・フュージョンのレパートリーに含まれるミル・カミノスはハサミ踊りを取り入れた音楽で、これまた初めて見た時には衝撃的だった。ハサミ踊りの現代化を切り取るだけで、ペルー・フォルクローレが持つ可能性と面白さがこれだけ見えてくる、それぞれがそんな可能性を感じさせてくれ、ますます楽しみになってくるのである。

イカのタコス

Tacos de Calamar

メキシコの代表的なごちそうであるタコスは、地域ごとに実にさまざまな素材を使います。

国中のいたるところにタコスの屋台があり、外国の巨大ハンバーガーチェーンよりはるかにおいしく栄養があり、しかも手早く食べられます。

かつてメキシコ領だった、米国のカリフォルニアやテキサス、アリゾナ、ニューメキシコ、コロラドなどの州でもタコス専門店や屋台が見られ、ベリーゼやグアテマラ、ホンジュラスといったマヤ文明の栄えた国々でもタコスを食べています。

タコスの歴史は、マヤやアステカ、さらには3000年前のオルメカ文明にまでさかのぼります。スペイン人が来る以前、マヤの人びとの食べるタコスの材料は、インゲン豆とトウガラシだったり、豚や鳥の脂と塩だったりしました。カボチャの種の油や野鳥の卵や肉（クジャクなど）、ウサギやシカ肉、イカやエビ、魚、巻貝、ウミガメなども使われました。トマトとタマネギと青いオレンジの果汁（レモンの場合も）と塩でつくったソースを、揚げた豚肉にかけたものも具にしました。ロブスターを使うこともあったようです。

スペイン人がチーズや腸詰め製の製法や、アジア地域のさまざまな野菜や牛肉をもたらしただことで、タコスはさらに豊かになり、メキシコを代表する料理に育ち



ました。そして、ほかのさまざまな料理とともに、メキシコ料理がユネスコの世界無形文化遺産に選ばれることに寄与しました。

祭りや催事、お祝いごとにタコスは欠かせません。私が子どもころ、「イカのタコス」などをよく家でつくりました。メキシコの海岸線は数千キロに及ぶため、海産物の料理が豊富です。「イカのタコス」は、いわゆる「海鮮のタコス」の一種であり、メキシコを訪ねる人にはぜひ味わっていただきたい一品です。

今回は、我が家の「イカのタコス」を味わっていただきます。

タコスは、ハンバーガーやホットドッグ、おにぎりと同様、手で食べてください。あまりのおいしさに、ついつい指をなめてしまうことでしょう。

■材料 4人分

- ・イカ（生か冷凍） 300g
- ・トマト中 2個 ・タマネギ中 1/2
- ・ニンニクペースト コーヒー用スプーン2杯
- ・コリアンダーみじんぎり スープ用スプーン1杯
- ・熟したアボカド 1個
- ・オリーブオイル スープ用スプーン3杯
- ・マスタード（和がらしではなく、ホットドッグ用） スープ用スプーン1/2杯
- ・トウモロコシか小麦粉のトルティーヤ 12枚
- ・レタス ・レモン大 1個
- ・マヨネーズ ・コショウ 塩
- ・甘口白ワイン 1/2カップ
- ・乾燥オレガノを挽いたもの コーヒー用スプーン1/4杯
（粉末オレガノの場合は半分の量に）
- ・月桂樹（ローリエ）の葉 1/2枚

■作り方

- 1) イカを洗い、オレガノとローリエ、塩少々と一緒に煮る。水を捨てて、1センチ角にイカを切る
- 2) トマト、タマネギ、コリアンダーを細かく刻む
- 3) オリーブオイルをあたため、切ったイカとニンニクを弱火で2分間ほど炒める。その後、刻んだトマトとタマネギ、コリアンダー、コショウ、マスタード、塩（足りなければ）を加え、白ワインを注ぐ。ソースが濃く煮詰まるまで動かしながら加熱する。
- 4) レタスを5センチほどの幅に切る
- 5) レモンを4つに切る
- 6) トルティーヤをポリ袋に入れて電子レンジで1分ほどあたためる。（ポリ袋を電子レンジで使う際は、袋がふくらんで破裂するのを防ぐため袋は密封しない）
- 7) アボカドを2センチ角に切る
- 8) 平皿にトルティーヤを1枚ずつ置き、その上に、イカとレタスとアボカドをスプーンで載せてレモン汁をしぼる。お好みでマヨネーズをかける。

プエルトリコ 主権不可侵の権利

6月17日、国連の脱植民地特別委員会はプエルトリコが独立と主権不可侵の権利を持つことを再確認する決議をした。プエルトリコはラテンアメリカ・カリブ諸国の1国家（ネーション）であり、米国との関係を「従属的」と批判。この決議はボリビア、キューバ、エクアドル、ベネズエラによって提案されたもので、2012年11月7日のプエルトリコの住民投票の結果とは無関係だとしている。プエルトリコは1952年より米国の自治連邦区となっており、大統領選挙や議会選挙での投票権を持たない。住民投票の結果は2400万人の有権者のうち61%が州昇格を支持し、34%が自治連邦区を支持、5%が完全独立支持だった。

この結果を受けて、米国議会下院のプエルトリコ代表（コミッショナー、議決権を持たない）はプエルトリコの州昇格を米議会に提出した。もしこの問題が審議されなければ国連に持ち込まれることになる。同決議はまた、7月25日は米国の介入から115周年で、全ての国民は不可侵の権利を有し、領土のための軍隊をもち、国家の領域が統合される権利を定めた1960年の1514条にあるように脱植民地化のプロセスが達成されていないことに懸念を示した。1972年からプエルトリコの脱植民地に向けた31の決議が採択されたが、国連のキューバ代表は、プエルトリコ人が政治的状況を自由に決定し、他国の介入なしに政治・経済・社会・文化的な夢を追求する権利をもっているが、その植民地的な状態はほとんど変わっていないと述べている。（Noticiasaliadas.org 2013/6/20）

コロンビア 軍事紛争の被害者数が初めて明らかに

コロンビアの軍事紛争は50年におよぶが、このたび初めて被害の数字が明らかになった。これは国立歴史的記憶センターがまとめた報告書「もうたくさんだ！ コロンビア—戦争と尊厳」によるもの。同報告によると、すみかを追われて難民となった人びとは570万人、殺害された人びとは22万人（軍事紛争勃発以来殺害された人の数は約60万人とされているが、残りは紛争が直接の原因かどうか不明）、行方不明者は2万5000人、拉致されたのがおよそ3万人。死者22万人のうち、戦闘員が4万787人だったのに比べて市民は17万7307人と被害者の8割が武器をもたない一般市民であったことになる。地雷による死者も1万人を超える。報告書には、虐殺や選別的殺害、性暴力、拷問、拉致、強制失踪などの被害者による証言も紹介されている。もっとも、紛争当事者（軍、ゲリラ、準軍事組織）は虐殺や殺害を隠匿することも多いため、実際の数字はこれより多いだろうと推定される。軍事紛争はまだ終わっておらず、同報告書も、その目的は国民が広く現実を知り、紛争解決のために努力することだとしている。（BBC Mundo 24 de julio de 2013）

ラテンアメリカ 出生率の低下

国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会(CEPAL)の報告では、ラテンアメリカ・カリブ地域ではここ数十年で出生率が大きく下がっている。人口交替率（総人口の維持に必要な出生率）を下回っている先進国ほどではないが、この調子で下がり続ければやがて老人が多くなり、経済を支える年齢層が少なくなると危惧される。この経済活動人口が非経済活動人口（扶養者）を上回る状態がラテンアメリカは2025年から逆転すると計算されている。現在のところ、人口を維持する出生率である2.1を下回っているのはブラジル、アルゼンチン、チリ、コスタリカ、キューバの四カ国のみだが、大多数の国では1950年に比べて出生率が60%に下がっている。出生率が最も低いのはキューバの1.5で、最高はグアテマラの3.71。CEPALを初め人口問題のシンクタンクは、今後社会的経済的な安定が保障されなければ出生率の低下に歯止めがかけられないと警鐘を鳴らしている。（Noticias Aliadas 15/07/2013）

私は今年度から運営委員に加えていただくことになりました。…思い返せば、私にとってのレコムとの関わりは1994年夏に当時メキシコ留学中の私に梅村さんからの依頼で、講演会のために来日することになったコナビグアのルシア・キラさんとメキシコから一緒に同行帰国したのがはじまりでした。子どもたちと離れて日本に向かう不安そうな心情のルシアさんでしたが、不安を越えて、子どもたちのために変革を求め、自分たちの活動を日本の人たちに伝えるという使命感あふれる姿に感銘を受け、「こんな大人になりたい」と思わされたものでした。

そんな私も母になり、なかなか自分のペースで生活できない毎日ですが、子育て中だからこそ、自分がどんな人と関係を築き、何を大事にして、何に時間を使うのかを考えることが増えました。レコムの活動を通して「次の世代のために自分たちができること」をラテンアメリカの人たちとともに考え、行動していくことで、これまでたくさん勇気をわけてくれたグアテマラの素敵な大人たちようになっていきたいものです。(嘉村早希子)

次回「そんりさ」印刷作業は東京で 月 日、
 発送は京都で 月 日(土)の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| Vol.143 グアテマラ・ジェノサイド裁判 | Vol.139 グアテマラ・沈黙を破る女性 |
| Vol.142 サパティスタの新しいサイクル | Vol.138 パナマ先住民族ンガベ・ブグレ |
| Vol.141 メキシコ・ナルコ回廊再訪 | Vol.137 グアテマラ視察報告 |
| Vol.140 グアテマラ・戦時下の性暴力 | Vol.136 ボリビア先住民族政治と道路建設 |

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』,資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先
 〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方
 TEL&FAX 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・
 FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>
 93万4657円
 <グアテマラ基金>
 49万7694円
 (2013年7月現在)